古文 枕草子・徒然草 (6)

徒然草

【ある人、弓射ることを習ふに、※もろ矢をたばさみて的に向かふ。
ある人が、 二本の矢を手に持って

師の言はく、
師が言うことには、

「初心の人、①二つの矢を持つことなかれ。
初心の人は、 持ってはならない。

後の矢を頼みて、初めの矢になほざりの心あり。
後の矢をあてにして、 初めの矢をおろそかにする心がある（からだ）。

毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ。」と言ふ。
毎回ただ当たりはずれを考えることなく、この一本の矢で決めようと思え。

②わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。
わずかに二本の矢を、（しかも）師の前でその一本をいいかげんにしようと思うだろうか。

③懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。
怠ける心は、 自らは気づかなくても、 師はこれを知る。

この戒め、万事にわたるべし。】
全てに通じるはずである。

（第九十二段）

※もろ矢…対になった二本の矢で、初めの矢を甲矢（はや）、後の矢を乙矢（おとや）という。

高名の木登りといひし男、人を掟てて、
名高い木登りといわれた男が、 人に指示して、

高き木に登せて梢を切らせしに、
高い木に登らせて 梢を切らせたときに、

④いと危ふく見えしほどは言ふこともなくて、
たいへん危なく見えた間は何も言うこともなくて、

降るるときに軒長ばかりになりて、
（梢を切る人が）降りるときに軒の高さくらいになって、

「誤ちすな。心して降りよ。」と言葉をかけはべりしを、
けがをするな。用心して降りよ。 かけましたので、

「かばかりになりては、飛び降るるとも降りなん。
これくらい（の高さ）になれば、飛びおりてもおりられよう。

如何にかく言ふぞ。」と申しはべりしかば、
（それなのに）どうしてそのように言うのか。 と申しましたところ、

「そのことにさうらふ。目くるめき、枝危ふきほどは、
そのことでございます。 目がくらみ、 枝の危ない間は、

己が恐れはべれば申さず。誤ちは、やすきところになりて、
自分が恐れていますから（私は何も）申しません。けがは、簡単なところになってから、

必ずつかまつることにさうらふ。」と言ふ。
いたすものでございます。

（第百九段）

重要語句

なほざり	いいかげんだ・おろそかだ
さうらふ	あります・ございます・…ます（でございます）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中の【 】で囲まれた範囲は、前半で筆者の見聞を記し、後半で筆者の考えを記している。後半の最初の三字を答えなさい。

(2) ――線①「二つの矢を持つことなかれ」と師が言うのはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 初心の人では、矢を二本とも当てることは難しいから。
イ 矢を一つにしないと、当たりはずれがわからなくなるから。
ウ 矢を二本持っていると、最初の矢がいいかげんになるから。

〔 〕

(3) ――線②「わづかに……思はんや」とあるが、これは何を言おうとしているのか。適当なものを選びなさい。

ア 師が言っていることは間違っているということ。
イ 師の前では、怠けてはいけないのだということ。
ウ 怠ける心は、自分では気づきにくいのだということ。
エ 怠ける原因は、矢が二本しかないからだということ。

〔 〕

(4) ――線③「懈怠の心」と、ほぼ同じ意味を表す言葉を第九十二段の本文中から六字で書きぬきなさい。

(5) ――線④「いと危ふく見えしほどは言ふこともなくて」とあるが、なぜ何も言わなかったのか。適当なものを選びなさい。

ア 梢を切っている人が、怖がって用心していたから。
イ まだ木に登った人が梢を切り終わっていなかったから。
ウ 木が軒の高さくらいしかなく、もう安全だったから。

〔 〕

(6) 「高名の木登りといひし男」は、「誤ち」はどのようなときにするものだと述べているか。最も適当なものを選びなさい。

ア 人から注意されないとき。
イ 目がくらんでしまうとき。
ウ 怖がってしまっているとき。
エ もう大丈夫だと思ったとき。

〔 〕